

< Chapter 2: The Speaker as Interlocutor (pp. 48-55) >

2.2 Deixis

2.2.2 Place Deixis

場に関する直示には identifying、 informing、 acknowledging の 3 種類がある。

informing :

- 直示的な副詞(here, there)や前置詞(above, in front of, behind)を用いて場所を知らせること。場所の特定(localization)は、原点(origin)と関係項?(relatum)の位置関係を座標システム(coordinate system)で表すことにより可能となる。

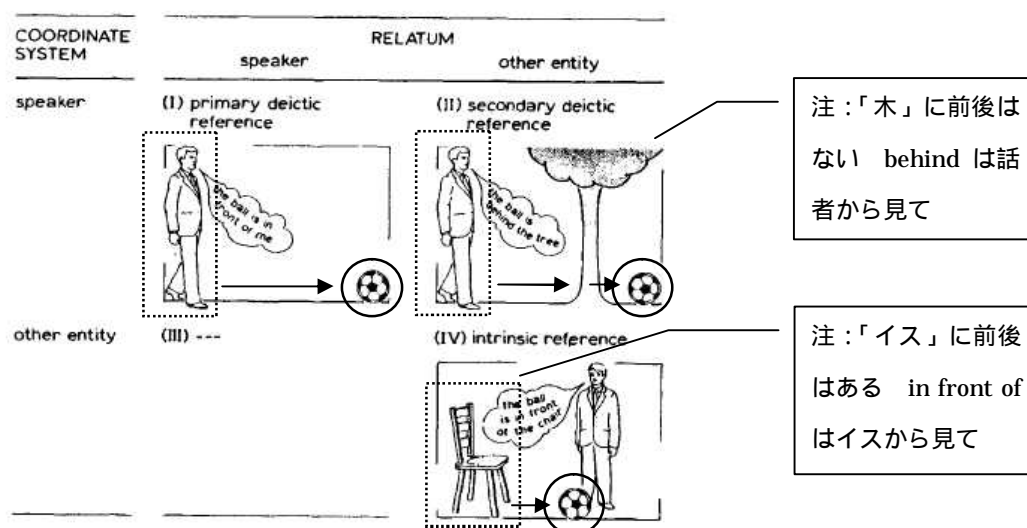


Table 2.1
Three basic systems of local reference.

- 座標システムを作る 3 つの次元のうち、垂直次元(vertical dimension)はたいてい話者間で共有可能である。一方、2 つの水平次元(two horizontal dimensions : front-back, left-right)はふつう話者間で共有されない。informing の表現は言語により方法が異なる場合がある。例えばあるアフリカの言語では、上の Table 2.1 の()のような場合に The ball is in front of the tree.と表現する。
- Table 2.2 の()は話者を原点に見立てて(secondary deictic reference と同じようにして)、The ball is to the left of the chair.と言うこともできる。このように同じ位置関係でも座標の見方を変えて違う言い方ができるので、コミュニケーションの妨げとなりかねない。座標システムが話者間でうまく機能しないことを coordination problem と呼ぶが、これを避けるためには聞き手はどの座標システムが使われているのか理解しなければならない。
- ()が空欄になっているが、そのような言い方は通常しないからである。仮に()のような位置関係を()の方法で述べるとすると、The ball is to the right of me.という不自然

ん言い方になる(普通なら The ball is to the left of me.となる)。

➤ Table 2.2 は不完全なもので、これ以外に 3 つの方法がある。

1) geographic reference : 位置関係を「上下(前後)左右」ではなく「東西南北」で表す。

2) addressee-based intrinsic reference : 聞き手を原点に見立てて位置関係を述べる。

3) local reference w/o coordinate system : 座標システムを用いない

- ・ here/there を用いる。話し手からの距離で 2 つは区別。ただし範囲設定の問題 (delimitation problem)がある。
- ・ 原点を設定せず、関係項のみを基準にする。close to, near, by など。対象物が関係項の領域内(region)にあるとみなす。
- ・ 類似物による直示(deictic-by-analogy)。これは以前述べた、demonstratum と referent が一致しない場合。波線部が類似物。demonstratum=analogy。

例 1) 自分の体を動物や自動車のボディーに見立てて、説明する

例 2) 同じ構造を持つ寮の自分の部屋を使って、他の部屋の様子を説明する

例 3) 地図を指差し、I live there.と言う。

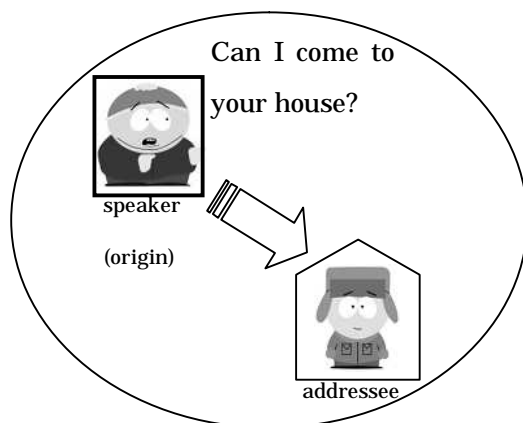
これらの全ての例で、実際の場所は他のところにある。

acknowledging :

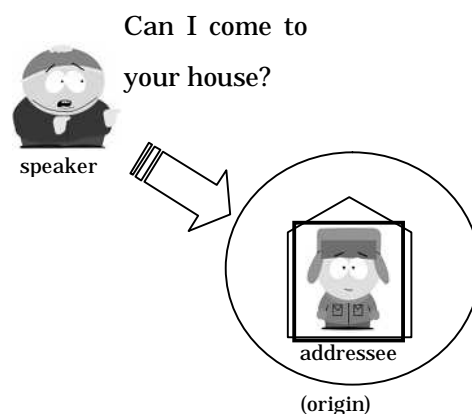
➤ 場に関する直示は come と go によっても表せる。Christian is going to the library.は話し手が図書館にはいないことを含意する。一方 Christian is coming to the library.と言った場合は、話し手は図書館内にいなければならない。

➤ come が用いられるのは、移動目標(goal of motion)が原点の領域(region of origin)と一致する場合である。come は原点が話し手からシフトすることが多いので、次の図のような 2 つの場合に come を用いることができる。

(A)原点(origin)が話し手のまま



(B)原点(origin)が聞き手へシフト



➤ bring や take/send はそれぞれ come や go と似たような特徴を有する。英語にはこれら移動動詞以外にも deictic acknowledgment を表す言葉がある (Fillmore, 1982)。

【感想等】今回の come と go はどのように使い分けや場所に関する直示の部分は、このように理

論で、かつ絵を使って説明できるようになっておくと、生徒に教えるときも役に立つように思う。
使えそうな情報を集め積み重ねて行くことが大切だと思う。平井